明治28年1月1日　第1巻第1号　CD No. 1

表紙　佐久間文吾　表紙
目次　目次
現内閣大臣肖像（＊写真九点）　口絵
貴族院議長侯爵蜂須賀茂韶／貴族院副議長侯爵黒田長成／衆議院議長楠本正隆／衆議院副議長島田三郎（＊写真四点）　口絵
戦捷の元旦（＊絵画）　佐久間文吾　口絵
太陽の発刊　大橋新太郎　一―二
論説
学界の大革新　久米邦武　三―八
戦勝後の教育　千頭清臣　八―一三
戦争後の学術　井上哲次郎　一三―一七
戦争と文学　坪内雄蔵　一七―二三
漢字の利害　三宅雪嶺　二三―二六
国語教育に就て　上田万年　二六―三二
事物変遷の研究に対する人類学的方法　坪井正五郎　三二―三三
経済的闘争　井上辰九郎　三三―三七
農業教育に就きて　横井時敬　三八―四一
対清政策　尾崎行雄　四一―四七
日本帝国の任務　中西牛郎　四七―五〇
史伝
紀元前の著名なる航海者　森田思軒　五一―五四
〔「講演」欄休載のことわり〕　五一―五一
ヲートルロー合戦の記　戸川残花　五四―六六
地理
京都の新案内記　大久保相模守忠隣　桜痴居士　六六―七〇
〔京都名勝〕（＊写真二点）　紫明楼主人　七一―七六
利根水源探検紀行　口絵
口画の桑港に就て　渡辺千吉郎　七七―八二
小説
取舵　尾崎紅葉　八三―八九
盲船頭櫓ヲ奪ヒテ起ツ（＊絵画）　桂舟　口絵
従軍人夫　饗庭篁村　八九―九九
雑録
譚苑
元時代の雑劇　依田百川　九九―一〇三
自然の楽　幸田露伴　一〇三―一〇八
霜の美　矧川生　一〇九―一一一
弘法にも筆の誤（＊ポンチ絵六コマ）　石橋忍月　一一一―一一三
亡卒為鯨（該話）　石川鴻斉　一一三―一一四
日章旗　旭日生　一一四―一一五
おもしろい　無名斎　一一五―一一七
文苑
賀発刊太陽序（＊漢詩）　学海居士依田百川　一一七―一一七
祝太陽新刊序（＊漢詩）　鴻斎居士石川英　一一七―一一八
題太陽巻首及雑題（＊漢詩）　一一八―一一九
敵愾百首（＊漢詩）　一一九―一二三
米国桑港の図（＊写真）　口絵
韻語陽秋　謫天情仙　一二三―一二四
新年　飯田武郷　一二四―一二四

明治廿八年一月一日を迎へてうたふ新体歌　中邨秋香　一二四—一二四
太陽の歌　佐々木信綱　一二六—一二七
短歌
芸苑
能楽（上）　大和田建樹　一二七—一三六
相撲の話　羽南外史　一三六—一四一
瓶花の技折　捻華主人　一四一—一四三
茶道さび栞　指月庵　一四三—一四三
古今演劇談　幸堂得知　一四三—一四六
家庭
家庭に於ける第一義　三島通良　一四六—一四九
婦人の令名　寒沢振作　一四九—一五〇
新年の礼式　有住斉　一五〇—一五三
正月遊ひの図（＊絵画）　藻斎永洗　口絵
正月　乙羽庵主人　一五四—一五六
〔正月〕（＊挿絵三点）　藻斎永洗　一五四—一五七
流行　流行記者　一五六—一五九
政治
征清の終結如何　一五九—一六五
議会に対する各党の党議　一六五—一六七
条約改正の進行　一六七—一六八
官報の進歩と今後の改良点　一六八—一六八
法律
ボアッソナード博士を送る　一六九—一七〇
法典調査会の消息　一七〇—一七〇
文学
明治の文学界　Y K 生　一七〇—一七三
東京図書館
軍歌　局外子　一七三—一七三
科学
理学博士原田豊吉君逝く　一七三—一七三
新案の自転車　一七三—一七三
槓梛子　一七三—一七三
金属界未来の覇者　一七三—一七三
美術
蒙古襲来の画巻に就て歴史画の効力を述ぶ　前田香雪　一七三—一七七
蒙古襲来の図（＊絵画二点）　口絵
分捕砲改鋳の新大仏　一七七—一七七
帝国京都博物館　一七七—一七八
太陽揚輝の美術家　一七八—一七八
商業
二十七年の経済界　K Y 生　一七九—一八一
農業
本邦の気候と作物の分配　矢部規矩治　一八一—一八二
果物の輸送法　矢部規矩治　一八二—一八二
利益は竟に地主に帰す　矢部規矩治　一八二—一八二
肥料の一好給源　矢部規矩治　一八二—一八三
牛乳貯蔵器（乳汁殺菌法）　矢部規矩治　一八三—一八三
蔬菜類の接木　矢部規矩治　一八三—一八三
鶏の去勢　矢部規矩治　一八三—一八三
農業改良の効果　矢部規矩治　一八三—一八三
農会の性質　矢部規矩治　一八三—一八四
昨年度の全国麦作収穫高　一八四—一八四
農事大会決議　一八四—一八四

工業
琵琶湖疏水工事の効果　一八四—一八五
写真術応用の発達　一八五—一八六
近世我国技術の進歩　一八六—一八六
天然瓦斯の利用　一八六—一八七
特許品陳列所　一八六—一八七
日本発明者の忍耐力欠乏　一八七—一八七
社会
聖徳
文武官及傭官庁別（明治廿六年十二月卅一日）（＊図表）　伊東祐穀　一八七—一八八
第一祝捷大会を観る　T O 生　一八八—一八八
書生社会近時の流行　一八八—一八八
廿七年中褒章下賜者　一八九—一九〇
廿七年中新聞雑誌発行停止一覧　一九〇—一九一
全国人口（自明治二十年至同二十六年）（＊図表）　伊東祐穀　一九一—一九一
海外思想
輿論一斑　一九二—一九六
第八議会に対する各新聞の筆鋒　一九六—一九八
社交案内　一九八—二〇〇
新刊案内　二〇〇—二〇〇
海内彙報　二〇〇—二〇一
海外彙報　二〇一—二〇四
記者謹告　二〇四—二〇四
愛読諸君ニ謹告ス　別一—一
CONTENTS.　英文目次
The Sun.
RETROSPECT OF THE YEAR 1894（＊千八百九十四年を回想す）　神田乃武　別一—二
THE TRIO. 1.THE KOWSING AFFAIR.（＊高陞号事件）／2.THE SYDNEY INCIDENT.（＊シドネー号事件）／3.THE DETRING MISSION.（＊デットリングの来朝）　神田乃武　別三—四
WOMAN'S WORK IN THE PRESENT WAR.（＊今回の戦争に於ける婦人の事業）　神田乃武　別四—五
THE CHINESE PRISONERS.（＊支那人の俘虜）　神田乃武　別五—六
THE FOREIGN ARBITRATION.（＊外国の仲裁）　神田乃武　別六—七
THE TREATY REVISIONS.（＊条約改正）　神田乃武　別七—七
THE BRAUTALITY OF THE CHINESE SOLDIERS.（＊支那兵の残虐）　神田乃武　別七—八
THE PRESENT CONDITION OF KOREA.（＊朝鮮の現状）　神田乃武　別八—九
THE STUDY OF THE KOREAN LANGUAGE.（＊朝鮮語の研究）　神田乃武　別九—九
MR. SONODA'S LECTUARE ON A FOREIGN LOAN.（＊園田氏の外債論）　神田乃武　別九—一〇
THE SPECIAL SESSION OF PARLIAMENT AT HIROSHIMA.（＊広島に於ける臨時議会の召集）　神田乃武　別一〇—一〇
CELEBRATION OF VICTORIES AT UYENO.　別一一—一三

明治28年2月5日　第1巻第2号　CD No. 1

（＊東京祝捷大会記事）　神田乃武
THE OPENING OF THE EIGHTH NATIONAL ASSEMBLY.　神田乃武　別三―三

表紙　表紙
目次　目次
陸軍大将小松彰仁親王殿下／陸軍少将伏見貞愛親王殿下（＊写真二点）　口絵
日本駐剳各国公使（＊写真五点）
大隈伯爵　同母堂　同夫人（＊写真）　口絵

論説
戦　上　側面的観察　千頭清臣　一―六
法典編纂の方針　梅謙次郎　六―八
史料の編纂は目下の急務たるを論す　坪井九馬三　八―一〇
戦争と文学（承前）　坪内雄蔵　一〇―一一
国防論　栗原亮一　一一―一四
亜細亜の大商戦　飯田旗郎　一四―二〇
階級制と君子の道　久米邦武　二〇―二六

講演
教育と兵事　曾我祐準　二六―二八
史学と類似学科との区別　坪井九馬三　二八―四一
釈迦十六羅漢（＊絵画二点）　橋本雅邦　口絵
工業教育　手島精一　四一―四三

史伝
曾国藩　中西牛郎　四三―四七
紀元前の著名なる航海者（承前）　思軒居士　四七―五〇
大久保相摸守忠隣（承前）　桜痴居士　五一―五五

地理
桑港繁昌記　山岸藪鶯　五五―六四
米国桑港パーレスホテル（＊写真三点）　口絵
広島の形勢　野口勝一　六四―七一
芸州宇品港（＊写真）　口絵
〔「京都の新案内記」休載の断り〕　七一―七一
東京花暦（其一）　胡蝶　七一―七四
〔挿絵四点〕　葦舟　七一―七三

小説
書記官　川上眉山　七四―八九
露のよすが　花圃女史　八九―九三

雑録
月と花　雪嶺　九三―九七
元時代の雑劇（二）　幸田露伴　九七―一〇〇
明詩の我国に関する者を論ず（上）　寧斉主人　一〇一―一〇四
見聞拾葉（一）　小宮山南梁　一〇四―一〇六
帆足万里の文章論　関旭巌　一〇六―一〇七
しら雪物語　落合直文　一〇七―一一一
ソクラテス的滑稽　蓮山人　一一一―一一三
譚苑　依田百川　一一三―一一六
肉食と菜色（＊笑話）　無名斎　一一六―一一六

文苑
漢詩　一一六―一一三
漢文　一一三―一一三

和歌
偶感（＊詩）　東久世通禧　一一三―一一三
貧人の歎（＊詩）　サウゼー・佐々木信綱　一一三―一一四
椿（＊詩）　伊藤落葉　一一四―一一四
一人の日本兵士（＊詩）サー、エドウヰン、アーノルド　一一四―一一六
新年の句（＊俳句）　一一七―一一七

芸苑
相撲の話（つゞき）　羽南外史　一一七―一二三
古今演劇談（承前）　幸堂得知　一二三―一二五
昔の落語家　二橋生　一二五―一二八

家庭
小弓の勝負　川崎千虎　一二八―一四〇
家庭に於ける第一義（承前）　三島通良　一四〇―一四三
新年の礼式（承前）　有住斉　一四三―一四四
鷹山公の家庭　大橋又太郎　一四四―一四六
大隈伯の母堂　岸上質軒　一四六―一五一
初午　乙羽生　一五一―一五四
〔初午〕（＊挿絵二点）　苔石　一五四―一五六
四季料理

政治
福沢翁の時事意見　福沢諭吉　一五六―一五七
〔時事〕　一五七―一六二
白耳義国全権公使ダヌタン氏の談話　ダヌタン　一六二―一六三

文学
〔時事〕　一六三―一六六

科学
故理学博士沢井廉君を吊す　小原重哉　一六六―一六七
〔時事〕　一六七―一六八

美術
元禄風俗と英一蝶　乙羽庵主人　一六九―一七七
〔一蝶肖像〕（＊挿画）　英一蛙　一六九―一六九
英一蝶朝妻船の画（＊挿画）　英一蝶　一七三―一七三
一蝶が帷子に画さし源氏須磨の巻（＊挿画）　英一蝶　一七五―一七五
英一蝶元禄時代四季日待絵巻（野村素介氏所蔵）（＊挿画二点）　英一蝶　口絵
〔時事〕　一七七―一七八

宗教
教事些語（上）　巌本善治　一七八―一七九
禅学流行の主因及禅宗の現勢　加藤咄堂　一八〇―一八一

商業
〔時事〕　一八一―一八七

工業
芝浦製作所を観る　KK生　一八七―一八八
大阪府下の煙突と汽罐〔時事〕　KK生　一八八―一八八

農業
農業資本の補充　KK生　一八九―一八九
蚕の糸　一八九―一八九

社会
〔時事〕　一八九―一九一
海外思想　一九一―一九三
輿論一斑　一九三―一九五
新刊案内　一九五―一九五
海外彙報　一九五―一九六
〔時事〕　一九六―一九七